

## 念仏と心の波

一。人間のすることは、行過ぎたり、足りなかつたりする。言い足りなかつたり、言過ぎたり、思ひ過ぎたり、思ひ足りなかつたり、そうしたことが人間の生活である。時候だつて、ある日は度はずれに暑かつたり、寒かつたりして、だんだん暑くなつてゆく。一直線に上つて行かないで、波形になりつつ上つて行く、この波形の幅が甚だしい時、氣候不順だという、不順な氣候は、弱い人の体には病氣を引きおこさすことが多い。

一。出来ることならば、この行きすぎと、行き足りなさの少い生活をしたものだと思われる。昨日はセルでも暑いようであつたのに、今日は袷に羽織でも寒いというように、ただ変化が甚しいということは、私の周囲の人を困らせるだけである。しかも氣候であるならば、結局、冬から夏になるか、夏の暑さから冬の寒さになるかであるが、人間の感情は変動があるばかりで、つまりは同じところにとどまつている。同じところにとどまれば、周囲の人をもまた同じところにとどまらしめる。もし向上の一道をたどるならば、その周囲をも向上せしめるであらうし、墮落するならば、その周囲をもまた墮落せしめるであらう。

人間の情に絶対の変動のない向上を求めることの出来ないことは、氣候の変化に、直線形の変化がないが如くである。

ではあるが、ヒステリックな女のように、さつきはいいお天気であつたものが、ただの一言で直ちに時雨れたり、三日も泣いていた者がころりとはしゃいだり、そうした感情の激動のままに生きるならば、人はその人と共に生きることを迷惑に思うであらう。喜びが波の頂であるならば、悲しみは波の谷である。この波の幅をじつと見つけて、そして波の動きが何であるかを照破されて、私が何であるかを知らして頂くことは、最も大切なことである。

一。聖人も悲しみたもうたし、聖人も喜びたもうた。しかしその悲喜の波が、人間のお悲しみが、人間の迷妄を覚まし、そのお喜びが、人間に正しい道を示されたのである。

一。人間の感情の幅の少い人、それは、世に人格者として尊ばれる人、あるいは降る照るの少い人として、可愛がられる人であらう。いと小さい事にも、恐れおののいて震え上つてしまつたり、小さい名利煩悩の満足にも、天地に躍つて喜んだりする人間、夫の一言に三日三晩も泣き明したり、帯一本でからりとお天気がよくなつたり、世の中に生きる夫が、毛一本ほどの苦惱に腐つてしまつて、家族の者にあたり散したりするようでは、第一家族の者すら尊敬するものではない。

であるから、修養に志す人はものに動ぜない人にならうとする、変動の波の少い人にならうとする。仏教ではこの問題を如何に考えられるのであらうか。

ここに於て、まず二つの世界が考えられる。その第一は波そのものを無くしようとする生き方であり、第二は波そのものはそのままにしておいて、それよりも、もつと根本のものを問題として、波の底に尊いものを成就して行こうとする世界である。

第一の喜怒哀楽の波を静めようとする世界が聖道門であるならば、その波をおこすにまかせておいて、動く波そのままを生かして下さる光を得ようとするところに浄土門、他力念仏の世界があるようである。

一。御開山聖人は、まず聖道門に入つて天台の法門を学び、やがて諸宗の知識を訪ねて解脱への道を求められた。報恩講式の文には、

「鎮としなえに明師に逢ふて、大小の奥蔵を伝へ、広く諸宗を試みて、甚深の義理を究む。然れども、色塵声塵、猿猴の情、尚忙しく、愛論見論、鶮膠ちちようの憶、彌々いよいよ堅し。断惑証理、愚鈍の身、成じ難く、速証覚位、末代の機、覃および回がたし。」  
と示されてあり、『歎徳文』には、

「定水を凝すと雖も、識浪頻に動き、心月を観すと雖も妄雲猶覆ふ。而るに一息追がざれば千載永く往く。」

とあらわされてある。これみな心の彼の静まらず、色塵声塵とて見るにつけ聞くにつけ、猿猴の如き情の忙せわしく動くことを示されたものである。ここに行き詰つた聖人は、浄土真宗によつて、如来の本願に救われる身となられたのであつた。

一。この世にある限り、利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽の八風が吹き、喜・怒・哀・2 楽・愛・憎・欲の浪が立つのはどうすることも出来ないことである。しかるに、この波をそのままにして、起こし放しにすることは、凡夫の救われざる恐ろしい相であるし、これを起さぬようにしようとすることは徒勞である。ここに第三の世界が開かれる。それは、この起る煩惱の根源に横たわる本罪、根本無明たる不了仏智の疑心を、仏智によつて亡ぼして頂いて、そこに尊くも美しき清浄真実の信心の智慧を成じて、一切の波の上にこの信心の光が現われて下さる生活に転じられることである。

この大信心は、いわゆる金剛不壊の大信心である。時ならずして霜が降りてくれば弱い桑の芽はすべてやられてしまふのが、梅の花は寒月霜雪の中にいよいよ香るのである。行きすぎる暑さ寒さにも、いかなる八風の中にも亡ばぬものは、願往生の大信である。他から来る八風の過不及の刺激にはよく堪えたと共に、自らの識浪の上には仏智が光つて下さる。ここにあるがままの個性があるがままにすべて否定せられて、本願によつて輝きあらしめて下さる世界が、仏凡一体の念仏の世界である。

一。子供を失つて泣き悲しむ親に、「泣くな悲しむな」と教えるものが聖道型の自力の人であれば、泣く人に同じつつ、泣く心をそのままに、大信心を獲得せしめ、自ら念仏の広大に覚めて仏恩に蘇り、やがて、我が愛子の死を悲しむまが、「お前が死んでくれたらこそ、私たちがこの深い大悲の世界を知らして頂くことが出来た。お前こそ善知識であつた。」と、その悲しみの情そのままが純化され、悲しみの涙が感謝の涙に、慚愧の涙に変わるのが、念仏の世界である。泣くだけでは、死んだ子は親を殺す。

それが真に自利成就することによって、子の死は決して犬死でなくなる。一人子を殺した親が、それ故に今はみ法によって世の燈となつていているようなことは、世にたくさんあることである。

波が立つことは、人生に生きている以上、どうすることも出来ないことである。しかるに、如来本願の大悲によつてこの波は美しい相となることである。

「晴れてよし 曇りてもよし 不二の山」富士の山は風によつて動きはしない。如来本願の念仏があるかぎり、貪愛瞋憎の雲霧の行きかふ相は、ある日は速く、ある日は遅く、ある日は濃く、ある日は淡く、念々刻々移り変ろうとも、変わるままに、変らぬものに生かされるのである。いかに風が速くとも富士の山がぐらぐらしたことはない。といつて念仏に力を入れて、これを動かぬものとすれば、富士の張子をかぶつて煩惱を隠そうとするのである。いかにこの張子の富士の多いことよ、強い風には飛ぶであろう。

一。正しい信は、具体的には、帰命のすべてが慚愧となり感謝となる。清浄なる智慧光によつて、光も色もない無明煩惱が、美しい色となるのである。煩惱なくして慚愧があろうか。しかし煩惱のみにて慚愧があろうか。如来の大悲光明まします故であり、煩惱あるが故である。慚愧の至境は感謝であり、感謝の極致は帰依である。帰依は如来によつて成ずるすべてであり、人間の浄化されてゆく相である。如来は人間のありのままを浄化し、純化して、それを通して人生に光つて下さる。

一。人間は行きすぎたり、足らなかつたりする。如来本願にはそれがない。それ故に、如来の本願によつて救われねばならない。念仏の衆生のみ撰取される如来の大悲も領解出来ることである。

行きすぎて成就する利他でなく、世話上手であまねく広まる大法でもない。願往生の自利より外に、利他の世界は開いてはこない。筍が昨日は三寸であつたものが、今朝は二尺になり、夕方は一尺に縮まっていた、というようなことはない。人間の心が、思いや口先で三寸になつたり、二尺になつたり、また一尺に戻つたりする。考えさせられることではある。念仏して私の心をじつと見つめっていると、一切は煩惱の動きに外ならないことが知られる。